

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第10号(平成26年3月15日)

読者数：462名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

「ピークリ」のこと

中国・地域づくり交流会会長
元広島市長
平岡 敬



来年は、被爆70周年。広島市では様々な記念事業が検討されており、近く発表されると聞いている。

そこで思い出すのは、被爆50周年(1995)のときのことである。当時、私は市長を務めていたが、戦後50年という節目の年だっただけに、被爆100年を視野に入れることを強く意識して、多くの職員とともに知恵を絞ったものである。

☆温泉と未来へのはがき

まずは、戦後を生き抜いてきた被爆者への施策として、被爆者療養施設の「神田山荘」に温泉を掘ることにした。ところが、井戸掘りが相当進んでも、一向に湯が出ない。毎朝、「もう出たか」「まだです」の繰り返しでいささか不安になって来たとき、地下1,800メートルで温泉脈に当たった。

税金を使って掘り当てた温泉だから、被爆者だけではなく市民の皆さんにも安い料金で楽しんでもらおうと思っていたところ、浴場組合のお歴々がやって来て「商売の邪魔をするな」とおっしゃる。事業の趣旨を説明し、結局被爆者と一般市民の入浴料金に差をつけることで収まったものの、行政サービスと民業圧迫との関係を考えさせられる一幕であった。

市民参加型の事業としては、「ひろしま21世紀へのはがき運動」がある。市民一人ひとりの思いを一枚のはがきに託して、未来へ残そうというもので、93,650通(市内からは76,495通)の応募があった。その一部は440ページの本として出版したが、すべてのはがきは平和記念資料館に保存され、被爆100周年には公開することになっている。つまりタイムカプセルによって、戦後50年目の市民の平和への意思を2045年の世界へ届けるという趣向である。それまで、戦争のない時代が続いていることを願っている。

☆デザイン力への期待

まちづくり関係では、前年のアジア競技大会開催でかなり体力を消耗していたが、「ひろしま2045ピース&クリエイト」(略称「ピークリ」)と銘打った事業を始めた。これは被爆100周年の2045年をめざして、優れたデザイン力によって社会資本を整備し、個性的で魅力ある美しい街を創造しようというものである。

焦土から50年経って、社会の風潮は「量から質へ」「モノからココロへ」の転換を求めている。完全とはいえないまでも、シビルミニマムはほぼ満たされた時代の次の目標は、心豊かな市民生活の実現であった。それを達成する手立ての一つが、市民生活と文化の接点としての役割を担っている公共建築物の建設に当たって、優れたデザイン力を活用することであった。

その時、私は三宅一生さんから聞いた話を思い出していた。三宅さんは、広島の焼野原で育ったが、高校生の頃、ノグチ・イサム氏がデザインした平和大橋を見て、デザインの力に目覚めたという。世界的デザイナーの原点が平和大橋のデザインであった。

「ピークリ」は広島市の都市景観の形成に重要だと認められる事業について、設計段階から建築、土木、ランドスケープ等のデザイン力に優れた設計家を起用して実施した。毎年、1点か2点ずつでも半世紀続ければ、被爆100年後の広島市は質の高い都市になり、そこに暮らす市民の意識が変わり、自分の街を誇りに思うようになるだろう。特色ある建造物群がつくり出す都市景観の中で生きる市民は、きっと新しい文化をつくり出していくだろう。こうした営みの継続によって、核悲劇の都市が人類の希望の都市になることを目指したのである。

☆ユニークな建造物

「ピークリ」の第1号は富田玲子氏設計の矢野南小学校であった。木や草で覆われた屋上庭園や中庭などは、校舎の茶色の瓦屋根とマッチし、子供たちが自然と親しみ、伸び伸びと育つように配慮された。

また原広司氏設計の市立基町高校は、エスカレーターが設けられるなど、学校建築としては異色のものである。市議会で「基町高校だけが立派になるのは、教育の平等の理念に反する」といった異論も出た。私は「学校建築の基準を低い水準に合わせるのではなく、高い水準をもって行って平準化を図るべきだ」と反論した。

戦前、私は本川小学校で学んだ。当時、鉄筋コンクリート造りの校舎は本川小学校と袋町小学校だけで、私たちはその校舎を誇りに思っていた。校舎は子供たちに大きな影響を与えるのである。基町高校の場合、校舎が立派になり、教育環境が整備されたことによって、以前に比べて生徒の学力が向上したのは事実である。

さらに山本理顕氏の西消防署は、全面ガラス張りで、市民に開かれた消防署を表現しているし、村上徹氏の安佐南区社会福祉センターや谷口吉生氏の中清掃工場など、それぞれが特色ある建造物となって、市民に親しまれている。

もちろん、設計者の選定についての批判もあり、清掃工場は寿命があるのでこの事業にはそぐわない、といった声もあった。それでも、ユニークな公共建築物の出現は、まちづくりに対する市民の関心を高めたと思う。

まちづくりは50年、100年の長いスパンで考えるべき仕事である。その間には社会状況の変化があり、トップの交代によって施策の重点が変わるのは仕方のないことである。「ピークリ」も、後に「ヒロシマ2045 平和と創造のまち」と改称されたが、財政事情もあって、スタート時の熱気が薄れてきているように感じる。

しかし、広島市基本計画に込められた都市づくりの理念と骨格は、次の世代へと受け継いでいかねばならないであろう。

まもなく確実にやってくる少子高齢化と人口減少、環境悪化の時代に、どのような広島市を構想するか——市職員だけでなく、市民自らが真剣に考え、知恵を出す時である。それだけに、市民参加型の記念事業が提示されることを期待したい。
(2014年1月記)

ひろしまのまちづくりの動き

○旧市民球場跡地、公園として一般開放!

現在、球場跡地は仮囲いをしてイベント等の開催中以外は閉鎖されている。これまで菓子博、オクトーバーフェスト、鉄板グランプリ等が開催されたが、基本的に入場料が必要だった。

4月からは公園として一般開放される。最終的な活用方針が固まり、整備が始まるまでの暫定的な処置である。休憩用のベンチ8基を設置し、仮囲いも一部透明パネルに取り換え、4か所の出入り口も午前10時から午後5時までの開放時は自由に出入りできる。

イベント等も可能だが、今のように主催団体から広島市に申請して許可を得る手続きはハードルが高い。市民団体等により構成された管理運営母体を組織し、市から委託を受けて自主的に運営できる体制作りが急務である。

現在、そのような動きがある。次のトークセッションでも語られているように、市民的な盛り上がりの中で管理運営組織を整備し、公園として有効に活用していけば、球場跡地のありべき姿が見えてくる。
(編集委員 瀧口信二)



○トークセッション「旧市民球場跡地を文化イベント広場に！」

NPOセトラひろしまが主催するイベント「ひろしま街文化展」の一環として、トークセッションを開催。

- ・日時：2014年1月25日（土）13～16時
- ・会場：旧日本銀行広島支店（1階ホール）
- ・パネリスト

山本一隆（広島市文化協会会長）

若狭利康（NPOセトラひろしま理事長）

前岡智之（日本建築家協会中国支部広島地域会まちづくりワーキング座長）

古池周文（広島市民球場跡地利用市民研究会代表）

平尾順平（NPOひろしまジン大学学長）

- ・コメンテーター：石丸良道（NPOセトラひろしま副理事長）
- ・コーディネーター：松田弘（美術評論家）



トークセッションの前に行われた4人のプレゼンテーションの概略は以下の通り。

- ・石丸氏：新たな市民文化創造の場として、仮想のイベント・カレンダーと明日の広場を紹介
- ・古池氏：あの場所の特徴を生かし、市民が主役の出会いの場として多様な可能性を残す。
- ・前岡氏：広範囲の視点、これまでの歴史、規制の枠を乗り越えたビジョンをもって考える。
- ・大橋氏：市長宛てのイベント開発を中心とした球場跡地の有効活用の提言書について説明以下、トークセッションにおけるパネラーの主張の概要を紹介する。

○山本氏：球場跡地の意義は理解されている。菓子博、オクトーバーフェスト等、集客に成功し、市民の力でやればできる。経済性の観点からも早く活用すべきである。イベントを可能とする必要最小限の施設整備で跡地を有効に活用しながら、最終形は時間をかけて決めればよい。広場を整えば、魂を入れるのが我々の役割であり、参加意識をもって、みんなで育てていく。

○若狭氏：世界的にも注目される重要な場であり、100年の計で考える必要がある。先にハコモノを作るのではなく、広島や世界のアーティスト達が発信する場として、現状ですることからやるべきだ。そのためにイベント広場として最低限のインフラと駐輪場、観光バス駐車場、回遊性のためのインフラの整備が必要。この地を有効に活用して外からの集客を増やす。

○前岡氏：「ひろしましみんひろば」は、原則いつでも誰でも自由に利用できることを目標に、市民団体により計画的に自発的に運営されるひろばを提案。ひろばには自分のまちの過去・現在・未来について見たり、考えたりする場も必要で、このトークセッションはその第一歩ではないか。生活の個室化から戸外化へ転換させることにより賑わいの場を創出できる。

○古池氏：イベントはよいが、閉じた空間は好ましくない。人類の役に立つチャリティのようなイベント、受け身ではなく市民が参加したくなるイベントが望ましい。有料イベントで閉じる場合は周辺を開放する等の総合調整が必要。多様な人がクロスオーバーできる場を模索する。

○平尾氏：球場跡地計画は収束させる方向でスピーディーに決めて欲しい。来年被爆70年を迎え、平和とどう向き合うのか、何を指すのか、広島市と市民が問われており、この地を起点とすべきである。行政の予算に頼るのではなく、独立採算型のモデルを実現して欲しい。

○会場より：いろいろな質問が出たが、一つだけ紹介。市の計画している緑地・イベント広場は具体的なイメージが湧かない。誰でも自由に利用できる空間も空虚である。この地にふさわしい強力なメッセージ性が求められており、ハコモノの可能性を追求すべきではないか。旧市民球場も市民生活に根差したシンボリックな空間であった。

それに対して、シンボリックなもの、市民が誇れるものなら賛成だが、使われ方が限定されるもの、威圧的で人の流れを遮断するものは反対という回答が多かった。

○松田氏：エリアや時代を分断せずにつなぐ大きなコンテンツがアートである。広島はイサム・ノグチや丹下健三等の世界史的なアートの流れに位置づけられたまちであり、広島の持つ潜在的な文化資源を生かすのにアートの力は大きい。

コメント 今回のトークセッションを積み重ねることにより、中央公園全体の管理運営母体が形成されていくことを熱望する。（編集委員 瀧口信二）

○広島の復興の軌跡 (第5回)・・・段原地区の成り立ち

段原地区は比治山の陰となり、原爆による焼失を免れた。残った古い街並みは戦災復興の対象から外され、被爆後20年間余とり残された。激しい反対運動を経て始まった再開発事業は、40年に及ぶ歳月と総事業費1370億円をかけて進められた。この一大事業の経過をたどる。

1. 戦災復興から取り残された段原地区

戦前の段原は市中心部に隣接した宅地開発の最前線にあり、ゆとりある郊外住宅を求める人々が相次いでいた。それが密集市街地と呼ばれるようになったのは、まさに戦後の現象である。

原爆被害を免れた段原は被爆後の住宅不足の格好の受け皿となり、市内中心部から家を失った人々が大量移り住んできた。こうして戦前の木造住宅と戦後のバラックが混在した市内最大の密集市街地が急速に形成された。更に被爆の翌年、南に隣接する旧陸軍施設跡地(現・広島大学霞キャンパス/広大病院)に県庁が移転し、昭和31年までの10年間この地にあった。広島駅から通勤する県職員が段原の中心部を通り抜け、その道路は「県庁通り」(後の段原本通り)とも呼ばれて市内随一の繁華街として賑った。

しかし、市中心部の戦災復興区画整理が進むにつれて若い世代が段原から流出し、県庁も基町に移転していった。昭和30年代半ばから段原は急速に衰退し始め、単身世帯・高齢者や借地・借家人が非常に多い地区となっていった。



明治27年と大正6年の段原
(広島新史：都市文化編)
北の的場方面から南に向かって市街化が進行し始める

2. 「段原再開発基本構想」の策定

戦災復興事業は、市内の中心部を対象に鋭意進められたが、その周辺部の整備は放置されていたと云える。復興事業が終盤を迎える頃、土地区画整理済みの地区と未整備の地区との格差が目立ち、次のステップの都市基盤整備を進める必要性が増大した。

そこで基町地区と段原地区が再開発の対象として登場してきたのである。両地区の整備は緊急を要し、同時に広島を復興を終了させる象徴でもあった。当時の『市民と市政』によると

「基町再開発を戦災地区改造の終幕、段原再開発を非戦災地区改造の開幕として、昭和40年代以降の大きな柱とする」と記されている。

昭和41年に初めて段原地区の航空写真測量の予算が認められ、その翌年には市に段原地区都市改造係が新設されて決定的な動きが始まった。昭和43年、広島市は日本都市計画学会に段原地区の基礎調査と基本構想の策定を委託し、東京工大石原教授が中心となって取りまとめを行った。



「基本構想」中国新聞(昭和44年5月1日)
幹線街路交差部に4棟の超高層住宅(24階)
高層住宅(10~18階)60棟

3. 反対運動と再開発事業の着手

昭和44年、都市計画学会からの報告を受け、山田節夫市長は「段原再開発基本構想」を発表した。この構想は「イメージプラン」と云われ、広い道路と超高層・高層ビルが林立した、当時としては画期的な理想像であった。あまりの変貌に住民は驚き、やがて生活が根こそぎ失われるという不安に変わり、反対運動が激化して行くこととなった。その後、広島市は民家を借り上げて現地事務所を設け、地区住民への説明に努めた。しかし「大きな都市計

画街路は必要ない」など、再開発の白紙撤回を求める住民運動はエスカレートして行った。

広島市は住民の強い反対運動の中で敢えて計画手続を進め、昭和46年には土地区画整理区域(74ha)の都市計画決定を行った。続いて昭和48年には緊急性の高い宇品線以西の西部地区(48ha)について、広島県知事の事業認可を得て再開発事業のスタートを切った。

事業認可を得たものの、事業計画(案)の縦覧時には意義申し立てが相次ぎ、5千余人から意見書が提出され、県都市計画審議会は「住民が区画整理事業を十分理解するに至っていない」として異例ともいえる条件を付けた。なお、東部地区(26ha)については平成7年に事業計画を決定し、直ちに事業着手した。



4. 事業推進上の幾多の難題と対策

事業はスタートしたが、依然として小規模宅地所有者や借家人などを中心に根強い反発があった。

このため市は100㎡以下の宅地の減歩を救済するため、土地の代りに清算金を支払う「過小宅地対策」を約束した。

しかし全世帯の6割を占める借家人対策は、土地区画整理だけの単独事業では対応することが出来ず、事業推進上の大問題であった。これを一挙に解決したのが、昭和53年に建設省が創設した「住環境整備モデル事業」であった。その柱は、借家人等を対象とした市営住宅建設の高率補助で、霞団地をはじめ700戸余の中高層住宅と賃貸店舗が建設された。また、老朽住宅の撤去費や集会所・児童遊園の整備費も補助対象とされた。

この他、広島市は住民主導による街づくりを推進するため「まちづくりコンサルタント派遣」「建築物共同化基本計画助成」「都心居住地区計画」など様々な制度を新設し、効果的な事業展開に努めてきた。

しかし、西部地区では建物移転も後半に入った昭和63年、立ち退き同意が得られない2戸に対して初めての強制移転を実施し、最終段階で一部住民と市が、清算金をめぐって対立が続いた。一方、東部地区の密集地では境界確定の作業が難航し、市の財政難もあって事業期間は計画より13年延びることとなった。

こうした幾多の困難を乗り越え、段原のまちは生まれ変わった。

段原再開発事業計画図

(広島市段原再開発部提供)
国鉄宇品線を境に「西部地区」「東部地区」に分割

5. 「世界人間居住賞」を受賞

この賞は、英国の Building & Social Housing 財団 (BSHF) が1985年に創設した、住宅・居住分野において国際的に権威のある賞。1989年には“広島市の復興と段原再開発事業”が受賞対象となり、英国副首相からトロフィーを授与された。

原爆被災した広島市が平和記念都市の理念を掲げ、被災を免れた段原地区を、住民と行政が協力して再開発事業に取り組んでいることが高く評価された。

事業期間40年に及ぶ全国でも類を見ない大規模事業が、今年2月25日の換地処分(工事完了後に行う行政処分で、従前地のすべての権利は、換地へ移行する)により実質終了した。戦災復興期に事業化されなかった地区が、別の形で戦後処理を終えたと云えよう。街の成長・発展と相まって、段原住民の一体感の醸成を如何に高めてゆくか、まちづくりは新たな局面を迎える。



段原地区の全景 (平成18年3月撮影)
低層住宅や中高層ビル建設が進んだ
(広島市段原再開発部提供)

(主な参考文献)

1. 「広島大学工学部 研究報告 第42巻題2号」(段原地区における再開発計画・事業の時期区分とその時期的特徴：石丸紀興ほか)
2. 「段原再開発事業西部地区のあゆみ」(広島市、平成18年)

(編集委員 高東博視)

○アイデアコンペの中から提案!

当面、2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中からこのエリアを考えるうえで貴重な提案、アイデア等を紹介していく。

・作品番号67「みんなのにわ」

公園は行政のものではなく、みんなで共に作り上げていく庭である。単なる憩いや安らぎの場ではなく、公園で何かをしたいと思ったら、実現可能な公園にしたい。

そのために市民に愛着をもって使ってもらえるパークマネジメントを提案している。

コーディネーターとして中央公園を管理運営する独立行政法人を立ち上げ、公園づくり協議会を中心として市民参加型のプログラムを実践していく。その協議会は、公園内の施設団体、既存のサークル団体やNPO法人や大学等の公園を利用する団体、学識経験者、地域住民で構成される。

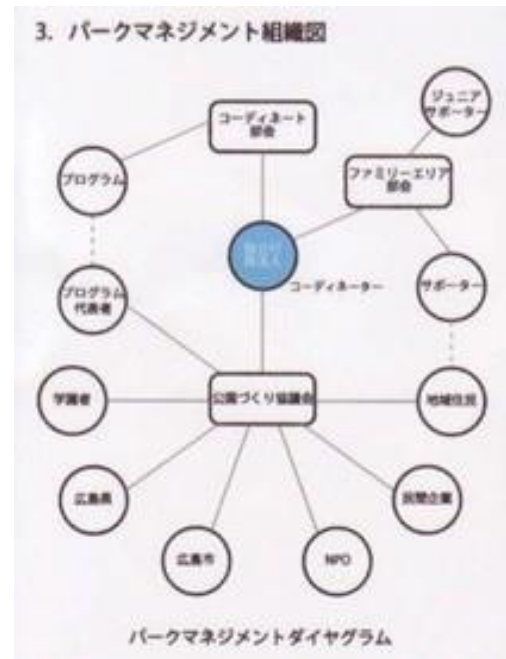
その他にファミリーエリアをサポートする体制を整える。

公園のマネジメントに市民を巻き込み、大きなイベントによる一時的な賑わいではない、日常的に公園に慣れ親しんでもらうためのソフトの提案である。

提案者：兼松渉氏(フリーランス)のコメント

中央公園を新たな「まちの居場所」とするために、市民に深く愛された球場の跡地があるここをどのように市民の方を含め、さまざまな方に使いこなしていただくかを考えました。市民の方が主体的に「使いこなす」ために行政、民間という枠組みを越えた新しい関係を長い期間を掛けながらつくり上げていく必要があると考えています。

まちづくりひろしまなど市民がまちづくりに主体的に関っている活動は新しい関係をつくるうえでの第一歩のように感じます。一方でこのような活動を持続させるためには、今の世代にとどまることなく、次の世代にどのように引き継いでいくかが重要な課題になると思います。



公園づくり協議会 公園づくり・運営管理に関して、今後どのように進めていくかを話し合う場、また部会で決まったことの報告と承認を聞く場。参加するのは、公園内に施設をもっている団体、プログラムを行っている団体の代表者、学識経験者、地域住民である。
コーディネーター部会 プログラム実施団体の選定や調整や公園内の案内、コーディネーターが独自に行うプログラムの準備と実施などの業務を行う。
ファミリーエリア部会 ファミリーエリアに関する情報の整理や新たな子どもの登録などを取りまとめる。また、遊具類の貸し出しや新たに必要な遊具など購入などを行う。サポーターやジュニアサポーターの選定、登録や教育を行う。
サポーター 地域住民の中で中央公園の手伝いをしたいと申し出た人たちのこと。特にファミリーエリアにおける子どもたちの見守り役として手伝う方5人で組織するチームを「五人組」という。
ジュニアサポーター 中学生から高校生までで公園内業務を手伝いたいと申し込んだ人たちのこと。以前、ファミリーエリアで遊んでいた子どもがジュニアサポーターとして子どもたちの面倒をみるような経験が行われることを期待している。

○人物登場：平尾順平氏（NPOひろしまジン大学学長）

寺町の一角に佇むビルの1階にひろしまジン大学の事務所がある。時間より少し早目に着くと、平尾氏はお茶の準備をしていたようだ。中断して取材に応じる。学長とはいえ、身の回りのことは自分でやれる人だ。

生まれ育ちは

生粋の広島人である。小学生の頃から器械体操を始め、体操の強いソ連や東欧の国に興味を持ち、大学も国際学部を専攻する。1年の休学を取り、アルバイトで貯めたお金でタイから西へ、ポーランドのアウシュビッツまで放浪の旅をする。

大学卒業後は日本国際協力センターに就職し、海外出張に明け暮れる。その中で、現地の人々の今の広島に対する認識の低さと自分の広島を説明する力の無さを痛感し、30歳で広島に戻って学ぶことを決意する。

ひろしまジン大学立ち上げの動機

最初、公民館の館長になって地域に根差した活動がしたいと思ったが、すぐには難しい。当時、他都市で芽生えていた「街をキャンパスに見立てた市民型大学」の動きに共感。広島県全体が学びの場になって、そこに住む人と学び合い、考え方をシェアできる場として「ひろしまジン大学」を立ち上げた。ひろしまの顔として人（ジン）を前面に押し出すために名前にジンを挿入する。

ひろしまジン大学の運営

組織は逆三角形で一番下に学長と事務局の2人、その上に授業を作る企画コーディネーター、その上にイベント等を手伝うサポート・スタッフ、その上に登録学生、その上は潜在的学生に開かれている。スタート時は6人で立ち上げたが、現在は登録学生まで含めて約2000人。学生の中から手伝いたい人がサポート・スタッフ（約120人）へ、更に一緒に授業を作りたい人が企画コーディネーター（20人強）へ降りていく。

みんなが作る側に参画して入り混じっているのがよいと思っている。スタッフは基本的にボランティア、コーディネーターの旅費のみは負担する。資金調達はスポンサーがいるわけではなく、行政や大学や企業のニーズに企画を提案し、業務として受注している。例えば、若者のマーケット調査を実施し、広島に関わる商品開発を大学の授業の一環として行う。企業が独自に行うよりジン大学が関わることで公共性が高まり、話題性が増して、マスコミ等が取り上げやすくなる。

これからの目標

住民参画ではなく行政参画が本来の姿ではないか。住民がやっていることに行政がお手伝いする。自分たちのことは自分たちが主体的に関わっていく当たり前の社会を目指したい。今すぐ市民意識を変えるのは難しいので、第一歩としてジン大学は自分たちの住んでいるまちを知るところから始めている。

行政を頼りにしている組織は弱い。行政からの支援は輸血であり、食べたものが血液として循環している正常な姿ではない。国の借金が膨らむなか、どれだけ行政に頼るのか。できるだけビジネス化して人も物も金も回っていく社会を描きたい。そのためにはジン大学だけでは無理なので、志の近い組織や人とつながっていく。

仲間になりたい人が同心円状に広がっていく、思いの連鎖・伝播を大事にしていく。とかく組織は周りに淵（バリア）ができて外からは閉じて見えるので、他の組織や人と一緒にやることを心がけている。ジン大学を開かれたプラットフォームにすることが課題の一つである。

学びながらスパイラル状に上昇することで、まちに変化が起こる。今、集う場ができたので、次はチームを組んで何かを具体化するプロジェクトに取り組んでいきたい。

▼ひろしまジン大学のホームページ：<http://hirojin.univnet.jp/>

コメント しっかりと未来を見据え、自分の志を大事に育てている。謙虚で礼儀正しい好青年だ。すくすく伸びて大輪の花を咲かせてほしい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴

1976年広島生まれ、広島市立大学卒、日本国際協力センター、広島平和文化センター勤務を経て、2010年ひろしまジン大学立ち上げ

岩重 律子（アステック代表取締役社長）

我が家には（自称）戦場カメラマンという困った息子がいます。一昨年の夏、シリアで音信不通となり、私は死ぬほど心配しました。

“仕送りをとめるぞ！”と脅すまで、7年間大学に在籍し、東南アジアをうろついた末、やっと卒業。しかし、就職難の中、就職活動もせず、半年あまりを無為に過ごしました。見るに見かねて、“進路を決めぬなら親の会社に就職しなさい！”と言うが早いか、派遣会社で働き始めました。真っ黒になり、筋肉痛に苦しむ程の重労働をしていましたが、半年後“貯金できたから仕事や～めた”と言い残し、またもや海外に行ってしまいました。

戦時下のシリアで自由シリア軍と一緒に行動したらしく、テロに同調しているのではないかと疑われ、公安のお役人さんが私のところに、調査に来ました。アレppoでジャーナリストの山本美香さんが撃たれて亡くなるというニュースは流れているし、息子からは連絡もないし、死んでしまったのではないかと、涙の出ない日はありませんでした。

無事帰国した息子の記事を週刊新潮が取り上げてくれましたが、原稿料で食べて行けないことは十分わかった筈なのに、まだ、戦場カメラマンを気取っているのです。ほんとに困った息子です。現在はイスタンブールに留学中なのですが、何ととっても、すぐにシリアに行く場所なので、心配は尽きません。



右が息子です

○紹介 まちづくり関連の団体とその動き

・カフェテラス倶楽部の紹介

広島には河岸緑地や平和大通り等の緑豊かな公共空間が多くあり、この空間をもっと自由に楽しく使えるようにしたいという思いで、1995年6月にカフェテラス倶楽部を結成した。

広島の街にパリのシャンゼリゼのようなカフェテラスが沢山できれば、街の魅力が増して活気が生まれる。

結成以来、月に1度は広島のどこかでカフェテラスを開く。

97年10月からは月に一度の定例カフェを第3土曜日の午後に平和大通りのANAクラウンホテル前の緑地で行っている。後はカフェテラス・セットを車に積んで、出前カフェを不定期に開き、すでに延374回を超えている。

今や通りすがりの女性や若い人、年配の人も参加しているし、他の団体や行政までやり始めている。また、広島ではすでに京橋川沿いや元安橋のオープンカフェは人気スポットとして定着している。

2011年には、河川敷や道路も賑わいを創出するためなら、オープンカフェなどで民間事業者が利用できる特例措置が認められた。広島発の先駆的な取り組みが全国的に広がり、現在大阪や東京でも試みられている。

▼ホームページ：http://www.c-haus.or.jp/cafe/The_kafeterataimusuv/biao_zhi.html

（カフェテラス倶楽部総支配人 山崎 学）

○カフェテラスを取材して

2月の寒風が吹き抜ける冬空の下、物好きな！と笑われてしまいそうだが、負けずにやり続けるところにこの倶楽部の逞しさを感じた。結成以来19年もの年月を継続してきた力によって河川法、道路法の高い障壁を突き崩すことができた。世話人の中に真に公僕たらん人がいたからこそ実現できたのではないかと。
（編集委員 瀧口信二）



○読者からの投稿その1

前号の「広大跡再開発計画案公表」を読んで

投稿者 藤本黎時（元広島市立大学学長）

特に関心をもって拝読したのは「広大跡再開発計画案公表！」です。今日（1月28日）の中国新聞の広島地域欄にも「広島ナレッジシェアパーク」を進める企業グループに売却され、53階建ての高層分譲マンションが建築されるとの記事が出ていました。

「公共用地を民間に切り売りしてよいことにはならない。公共用地は国民・市民の財産であり、当面の使い道がなければ、市民が共有して利用できるように開放すればよい。」という貴誌のご主張に全面的に賛成です。

昭和21年（1946）頃、原爆で校舎を焼失した当時の広島文理科大学、広島高等師範学校、広島高等学校、広島師範学校などは賀茂郡の黒瀬町に、広島工業専門学校（現・広島大学工学部）は呉市に移転していました。大学は焼け野原の広島に置けないので、岡山に移されるという噂も流れていました。実際、大学や専門学校などを広島市内に再建するのは難しい事情があったのでしょう。

当時、私は旧制中学校3年生で呉市に住んでおりました。呉市の住民も大学や専門学校が広島市から他の都市に移されることに大反対で、危機感を感じていました。呉市の町内会でも、大学や専門学校を広島市に残すための募金運動が始まり、自治会の月当番が各戸を訪ねて寄付金を集めました。私も将来、広島で大学や専門学校に進学したいと思い、わずかな自分のお小遣い（20円）を寄付したことを覚えています。

また、呉市に移転していた広島工業専門学校の学生たちは、靴磨きの箱を用意して呉市の街角や映画館の前などに陣取り、進駐軍兵士（駐留オーストラリア兵）たちに「シューシャイン」と呼びかけ、兵士の靴磨きのアルバイトを始めました。それで得たお金を、大学を広島に残すために寄付しようとしたのです。このことは当時の新聞でも報じられました。

私にとって東千田町の広大キャンパス跡地は、学生時代から教員時代の40年間を過ごした懐かしい思い出の場所であるばかりでなく、市民の浄財と熱意によって確保された神聖な土地であり、市民のものだという思いが強いのです。

10年位前、国立大学財務・経営センターが広大跡地を売りに出したとき、県会議員、市会議員、広島大学長、広島市立大学長などで跡地の検討委員会を編成し、数回会合を持ちました。当時、私は広島市立大学学長でした。その翌年、広島市の要職にある方が私と前川功一先生（当時、広島大学副学長、現在、広島経済大学学長）に、広大跡地を「知の拠点」として利用構想を早急に作成するよう依頼されました。

二人は数回会合を持ち、アイデアを持ち寄って2か月位で利用構想案を作成して広島市に提出しました。その構想案は「知の拠点」を実現するためのものではなく、国立大学財務・経営センターに「広島市としては、知の拠点構想を持っており、ぜひ跡地を購入したい意思があるが、取り敢えずお金がないので、もう1年猶予がほしい」という理由づけに役立ったようです。

このような訳で、市民にとって一番利用価値のある都心の3.8haの未利用地が分譲マンション用地となることは、財政上の問題があって地方自治体では購入できないとはいえ、真に残念なことです。

以上、「まちづくりひろしま」第9号を拝読した年寄りの偶感と愚痴です。どうぞご賢察いただければ幸いです。

○読者からの投稿その2

昨年秋口に、37年ぶりに東京から広島に戻り、30数年にわたって産官学や産学プロジェクト、国際プロジェクトを手掛けてきたスキルやノウハウを生かし、少しでも広島を元気にするプランや仕組みを構築したいという井上英之氏から投稿があったので、紹介する。

外国人観光客向けゲストハウスの整備に関する提案

投稿者 井上英之（マーケティングプロデューサー）

広島市は、世界遺産「原爆ドーム」と平和記念資料館を抱え、欧米を中心に外国人観光客の関心が高く、来訪頻度も比較的高い。訪日観光客 1000 万人時代を迎え、将来的な 3000 万人を超える外国人観光客の来訪が予想され、宿泊滞在施設の整備も喫緊の課題である。

そのための廉価で長期滞在可能な宿泊機能を核とし、観光客と地域住民の交流機能も併せもち、運営に関しては大学生のインターンや地域ボランティアの協力も織り込んだ観光・交流・宿泊インバウンド対応施設として、ゲストハウスを整備する。

これまで「ヒロシマ」が蓄積してきた「平和」に関する知見をはじめ、スポーツコンテンツ（野球、サッカー他）、文化コンテンツ（アート、神楽等）の受発信拠点としても整備する。

立地に関しては、別途空きオフィスのロケーションを精査し、広島市内中央部の一定地域に数百㎡以上集中している立地にて展開。一体型新設でなくとも、分散オフィスを改修した、ネットワーク型の宿泊施設を想定して整備する。

域内に、共同ロビー施設やコミュニティ施設も用意し、交流機能や情報受発信機能を充実する。同時に、イベントプログラムや参加可能プログラムを用意し、レンタサイクルなどを活用し、市内各施設や各店舗とも連携、都心部での滞在率を高め、回遊性向上、にぎわい創出を目指す。

□編集後記

“まちづくりひろしま”もいよいよ二桁、第10号となりました。多くの読者からの投稿があり、充実してきたことがうれしい限りです。また、まちづくりに関わっている民間のリーダーのインタビューは、私たち編集委員にとっても楽しく、うれしい時間となっています。

これからも読者 1000 人を第一目標に、より充実させていきますのでご期待ください。

それにしても、ソチ・オリンピックは、喜んだり、残念だったり、楽しかったですね。開催国ロシアの木訥（ぼくとつ）で、したたかな国民性を強く感じることができました。日本は、全体的に見てよくやったということでしょうか。

みなさんは、いかがでしたか？

（編集委員 前岡智之）

*ひろしまのまちづくりについて

皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は500字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	ひろしまコミュニティカレッジ代表